

動物医療センター（家畜病院） 社会の中の役割

現在の世の中は、「子」ではなく、「動物が家族のかすがい」となっていることも多く、高度診療を求めて多くの飼い主が動物医療センター（家畜病院）に来院されます。ここは二次診療施設であり、来院する動物はすべて開業獣医師からの紹介症例です。動物は話してくれませんが、診断に協力してくれないので、診断には苦労する場合も少なくありません。また、飼い主の方はある意味で子を持つ母親と同じような感覚をお持ちであり、我々は小児科と同じと感じています。

ほとんどの人間の病気は犬や猫にも見られます。この病院で最も多い症例はガンで、特に外科手術例の約半数がガンです。それ以外に、脳腫瘍や椎間板ヘルニアなどの神経病、アトピーなどのアレルギー性

皮膚病、糖尿病、炎症性腸疾患など、人間でもやっかいな多くの症例が認められます。

こういった病気も含めて、動物の病気も人の病気と同様、様々な形で遺伝因子が関わっています。その多くは多因子で、その解明はなかなか進みません。中でも、大型犬の股関節形成異常や発育期の骨関節疾患などは遺伝的背景が示唆されていますが、詳細な解明には時間がかかりそうです。一方、単一の遺伝因子が関与する病気もあります。特に、若い間は元気でも、ある年齢になると病気が現れる、といった疾患は飼い主にとってつらい病気となります。

写真左は、血友病のビーグル犬です。今は病院で、この研究をしている大学院生と動物看護師に可愛がられ、毎日を過ごしています。ちょっとぶつけたりするとたちまち出血するので、世話をするにも気が抜けません。これは、血液凝固系第8因子の欠損症で、人の血友病A型と言われる



ものと同様の遺伝子変異による疾患です。一方、写真右は、網膜変性症（進行性網膜萎縮：PRA）のミニチュアダックスフントです。遺伝子変異の明らかなPRAが既に9犬種で報告されていますが、この犬種ではまだ明らかではありません。この犬は完全な盲目ですが、今は非常勤の獣医師に可愛がられ、毎日を無事に過ごしています。

こういったいわゆる遺伝病については、その予防の観点から、遺伝子変異を確定し、遺伝子診断法を確立することがもっとも重要です。原因遺伝子が単一で、その遺伝様式が確定すれば、親の遺伝情報から交配してはいけない組合せが決まります。その情報をできるだけ発信することにより、不幸な遺伝性疾患の動物を減らすことができます。また、人間にもみられる遺伝病の研究にも役立つものと思っています。

動物医療センターは、日々の診断、治療を通して直接的に市民と接点を持っております。同時に、遺伝病だけでなく、多くの病気について、医学やその他の分野と様々な共同研究が行われています。これもこの施設の大きな特徴であり、その充実を目指して模索しております。

獣医外科学研究室 佐々木 伸雄 教授